

テーマ	「多様な学び方」を支える教師のリーダーシップ
発表者 (所属)	企 画 者 : 小野絵美 (長野県松本市立筑摩小学校) 司 会 者 : 近藤佑生 (三重県桑名郡木曾岬町教育委員会) 話題提供者: 小野絵美 (長野県松本市立筑摩小学校) 渡邊克吉 (山梨県富士河口湖町立小立小学校) 瀬戸山千穂 (群馬県前橋市立大胡中学校) 指定討論者: 宗實直樹 (関西学院初等部) 赤坂真二 (上越教育大学)

【発表概要】

≪ 企画趣旨 ≫

学級集団の中での個の姿は「多様」である。では、「多様」な個を支える学級集団のあり方やその学級集団を支える教師のリーダーシップのあり方とは、どのような姿なのであろうか。

本シンポジウムにおける話題提供者は、クラス会議を基盤に教育活動を展開する教師、協同学習を基盤に教育活動を展開する教師、小・中学校の学級集団づくり道徳科を基盤に教育活動を展開する教師、と立場や校種は異なる。しかし、教師のリーダーシップとして、「多様な学び方」を支える人的環境としての集団づくりの充実に取り組んで来たことには共通している。それぞれの実践者が、もっている教育観、体現している指導行動は何であろうか。時間の限り語り合うことで明らかにしていきたい。

≪ 話題提供 ≫

長野県松本市立筑摩小学校 小野 絵美

「クラス会議で大切にしてきた教師のリーダーシップ～小1の事例～」

小学校高学年のクラス会議における児童の認識を分析した木下・赤坂(2022)は、「クラス会議が協働的学習をすすめるうえで課題とされるソーシャルスキルを高めるための基本姿勢・態度の獲得に視点が向く、意義のある」活動であることを示唆している。それを踏まえて、筆者は、「相手意識の醸成」を目的として、小学校1年生30人と継続的に10回以上クラス会議を実施してきた。その際、大切にしていたことは、話し合いスキルや議題だけでなく、クラス会議の目的やあり方を共有したり、児童の実態のよさを価値づけたりしてきた。その具体について紹介したい。筆者はそれ以前の学級でのクラス会議は数回で自然消滅する等失敗を繰り返していた。

本シンポジウムでは、クラス会議を継続的に取り組んできた際の児童観や指導観等、教師のリーダーシップとして大切にしてきたあり方について、具体的な事例をもとに話題提供したい。

引用文献：木下将志・赤坂真二(2022)「クラス会議に対する児童の認識に関する探索的検討 - 小学校高学年を対象とした自由記述分析 -」日本学級経営学会誌 第4巻 pp.13-22

≪ 話題提供 ≫

山梨県富士河口湖町立小立小学校 渡邊 克吉

「児童同士の相互作用の促進をめざした協同学習の実践」

教師のリーダーシップを考える際に、視点の1つとして教室内の人間関係づくりへの働きかけがある。子どもが生き生きと学校生活を過ごす上で、良好な人間関係に支えられ、学級が自分の居場所とし

て機能することはきわめて重要である。人間関係づくりに関して、その有効性が示されているものの1つに協同学習がある。協同学習について杉江（2011）は、「集団の仲間全員が高まることをメンバー全員目標とすることを基礎に置いた実践すべて」であるとしている。

協同学習は学習面や人間関係形成などの社会面に対する効果が指摘されている。例えば、町・中谷（2013）は協同学習の効果を学習面と社会性の育成面のそれぞれから検討し、「児童・生徒どうしの相互作用が学習成果を促進する」ことや「学習に対する理解を深めるだけでなく、同時に生徒の社会的側面を促進する可能性が示唆されている」と指摘している。

筆者は先行研究を踏まえ、学校生活の大部分を占める教科の学習場面において、人間関係づくりの視点を取り入れた協同学習の実践を行ってきた。本シンポジウムでは、協同学習を効果的に適用するための導入期の授業プログラムや、振り返り場面における相互評価の有効性および課題について話題提供を行いたい。

引用文献：杉江修治（2011）『協同学習入門 基本の理解と51の工夫』ナカニシヤ出版 p p. 24-25
町岳・中谷素之（2013）「協同学習における相互作用の規定因とその促進方略に関する研究の動向」名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 p p. 83-84

≪ 話題提供 ≫

群馬県前橋市立大胡中学校 瀬戸山千穂

「子どもたちの豊かな学びを支える学級集団づくりと道徳科の指導」

小学校でも中学校でも、子どもたちの豊かな学びを支える基盤は、集団のなかでの個々の関係性である。ヴィゴツキーの発達の最近接領域に示されるように、自分だけではできなくても他者の助けを借りて自分ができることを増やすことが、結果として自分ができることを増やすことに繋がるからである。マッカーシー(1935)は3歳～5歳までの子どもの研究で、「子どもが自主的には駆使できないが、指導のもと、あるいは集団のなかや、協同のなかでは駆使できるような機能群があり、これは5～7歳までの年齢の発達水準と同程度である」ことを示した。これは幼児期に限らず、小中学生、及び学校職員のような大人の集団でも同様であることを体験的に感じている。学級内での一人ひとりの繋がりを網の目のようにつくるのが、個々の学びを促進する原動力であるといえよう。

今回の提案では、現在担任をしている中1における、①朝の会やクラス会議での取組 ②道徳科の授業実践について、教師が指導性を発揮する場面と子どもに委ねる場面とに分けて話題提供する。子どもの主体性を尊重しつつも、活動あって学びの薄い学習を避けるためには教師の指導性が不可欠である。啐啄同時に例えられる、内側から殻をつつく子どもの姿の見取りと、外側から殻をつつく教師の介入のタイミングを、具体的事例をもとに検証していただきたい。

引用文献：L.S.Vygotsky（1935）. Фашизм в психоневрологии. М.-Л.: Биомедгиз. 土井捷三・神谷栄司訳（2003）『「発達の最近接領域」の理論』三学出版 p65